

湾岸諸国間の領土紛争 — アブー・ムーサ島、大・小トンブ島、シッリ島の場合 —

石田 進

I. 島の位置と争点

アブー・ムーサ島、大トンブ島、小トンブ島¹⁾、シッリ島および大ファルル島と小ファルル島は、ホルムズ海峡から湾岸内に入っすぐの湾内に散在している（地図1参照）。大・小トンブ島と同じく大・小ファルル島はともにイラン沿岸から極めて近く、アブー・ムーサ島およびシッリ島は湾岸のほぼ中間に位置する。

これらの島のすぐ近くをタンカー航路が走り、かつ石油・天然ガス資源が附近に発見される可能性が高そうなのが、これらの島に戦略的重要性を与えていることは確かである。

これらの島のうち、大・小ファルル島を除く（大・小ファルル島については領有権が争われたことはなく、古くからイラン領として認められてきている）²⁾ 4島をめぐり、19世紀末からイランとアラブ（特にアラブ首長国連邦を構成するシャルジャとラス・アル=ハイマ）の間で領有権をめぐって繰り返し争われてきた。

II. 島の概況

イランとアラブの間で領有権が争われてきたこれら4島の20世紀初頭から半ば頃に至る概況は以下のようであった。

アブー・ムーサ島³⁾。4島の中では比較的大きく、真水もかなり豊富である。住民はアラブ系で約60人を数え(1949年)、細々と漁業や天然真珠採りに従事している。彼らは島の南岸の、小さい泥づくりのおよそ50戸からなる集落に住んでいる。

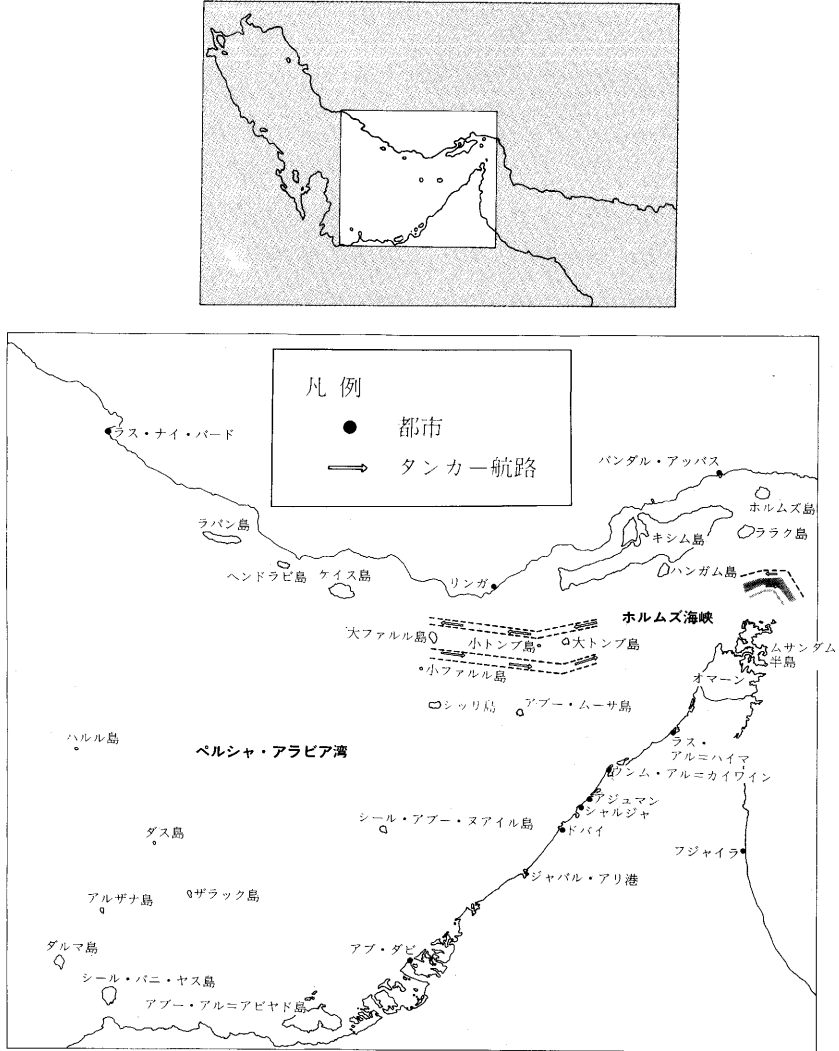
島にはベンガラ (red oxide、赤色の顔料) の埋蔵資源があり、イギリスやドイツの企業が領有権を持つとイギリスも認めているシャルジャの首長に利権料を払って採掘利権をえて採掘している。20世紀の半ば頃この利権を持っていたのは Golden Valley Colour Company で、シャルジャ人がマネージャーを勤め、約140名の労働者を雇って冬期間のみ営業していた。島の東南端にこの会社の荷揚げ港があり、そこに倉庫を含む集落があつて、労働者はそこに住んでいる。

アラブ沿岸やイラン沿岸との間で定期船便はなく、ときどきアラブ沿岸所属の船が嵐を避けるために島に寄るだけである。しかし、1957年時点では月1回イギリス海軍の艦船が島を訪れるようになっていた。また Golden Valley Colour Company が営業する冬期間だけ島とシャルジャの間に無線連絡が行われるようになっていた。

この島にはシャルジャの首長によって任命された代表者がおり、誰か島への正規の訪問者があるとき、シャルジャの旗を掲げて迎えることになっている。イギリス当局は訪問者があるときだけでなく、常に旗を掲げて領有の強い意志表示をするよう勧告している。

シッリ島⁴⁾。アブー・ムーサ島より一回り大きな島で、土地は比較的肥沃で、住民もかなりいる。ベンガラ資源もある。後述するように、シッリ島については比較的早くイラン(当時はペルシア)の事実上の支配をイギリス

地図1 湾岸の諸島



出所：Gulf of Oman to Shutt al Arab, Printed September 1987.

も認めることになったため、島の状況についての情報はイギリス側の資料には少ない。

大トンプ島⁵⁾。直径 4 km 弱のほぼ円形の小島で、真水は良質ながら量は少なく、したがって本来住民は多くない。わずかながらベンガラ資源もある。この島の重要性は 1913 年イギリスによって建てられた灯台があることによる。当時イギリスはこの灯台の建設認可を領有権者と見なしていたシャルジャの首長からえており、無視されたイラン（当時はペルシア）は島の領有権を主張して抗議した。

この灯台を管理するための 7 人のインド人と 2 人のイラン人が働いており（1949 年当時）彼らを含め 1934 年頃の住民はアラブ系で約 50 人（1949 年では約 80 人）を数えた。住民は漁業、牧羊に従事し、また小規模なデーツ林もある。その後ラス・アル=ハイマがシャルジャから独立⁶⁾して以降、大トンプ島はラス・アル=ハイマの管轄に移され、ラス・アル=ハイマの首長に任命された人物が島に在住し、島を管理して、ラス・アル=ハイマの領有権がイギリスによっても認められた。

この島を訪ねる船の定期便はなく、通りすがりの船が嵐を避けるためや、まれには真水の補給や物々交換のために島に寄るだけである。20 世紀半ばすぎにはイギリス海軍の艦船が、アブー・ムーサ島に対すると同様、月に 1 回島を訪ねている。

この島のベンガラを採掘している企業は 20 世紀の半ばすぎまでのところなく、アブー・ムーサ島とシャルジャの間に実現しているような無線連絡の便はない。この島の領有をねらっているイラン勢が上陸してくる事態に備え、イギリス海軍当局はこの島にある灯台の管理者との間に、イラン人が上陸してきたときは灯を入れないことで急を知らせるという内密の約束が出来ているといわれる。しかし、上陸してきたイラン人たちが灯台守りを強制して灯を入れさせたり、あるいはイラン人自身が灯をともしれば、この密約も有効ではないという批判がある。

アブー・ムーサ島の場合と同様、この島でも誰か訪問者があるときだけラス・アル=ハイマの旗を掲げて迎えている。イギリス当局は常に旗を掲げて領有の意志を強く表示するようにと勧告しているのもアブー・ムーサ島の場合と同様である。

小トンブ島⁷⁾。大トンブ島の西約13 kmに位置し、大トンブ島の半分以下の小島である。真水はなく、したがって定住者はいない。ときどき少数の漁民が短期間やってきてキャンプして漁をすることはあっても、定住はしていない。

1908年イギリス当局は小トンブ島は大トンブ島に附属する島であることを確認し、ラス・アル=ハイマに領有権があると認めた。その領有権の証として、この島に人は定住させられないまでも、塚やケルンを築いたり、ラス・アル=ハイマの首長によって任命されて大トンブ島に在住している人物がときどき小トンブを訪問し、そのたびにラス・アル=ハイマの旗を掲げるよう希望している。

III. 支配の二重性格

以上のように、大・小ファルル島を除けばアラブ側のシャルジャおよびラス・アル=ハイマの領有権が確立し、しかも当時の湾岸の支配者イギリスもそれを承認していた4島（アブー・ムーサ島、シッリ島および大・小トンブ島）に対し、19世紀末頃からイラン（当時はペルシア）側が執拗に領有権を主張し、ときとして実力行動に訴えて占拠の試みを繰り返すようになったうらには、これらの島の支配をめぐる二重性格ともいうべき歴史的経緯があったことが指摘される。

17世紀以前にまでさかのぼってこれら4島の支配・領有の歴史がどうであったかを究明することは困難で、湾岸を支配していたイギリス当局もそ

れは断念している。しかし、イギリス側の見解によれば、18世紀の初め頃より、シャルジャやラス・アル=ハイマに本拠を置いていたアラブのジョワーシム部族がイラン側の沿岸も含む4島周辺の湾岸全域で活躍していたとされる。

その頃ペルシアでは1747年にナーデル・シャーが死亡すると混乱が広まり、当時のバンダル・アッバスおよびホルムズ島の長官はいろんな勢力の争いに巻き込まれ、多方面から貢物を上納するように圧力を受けて窮地に立たされていた。そのような長官を支援するために1750年頃にジョワーシム部族の一部が湾岸のアラブ側からイラン側に渡り、リングなどに居座ることになった。

リングに居を構えたジョワーシム部族の長は4島の支配をリングから行うことになり、しかもその支配は湾岸のアラブ側に残ったジョワーシム部族との諒解に基づくものであったと理解されていた。

事態をいっそう複雑にしたのは、リングに拠るアラブのジョワーシム部族の長は年月がたつうちに次第にペルシアの支配体制に組み込まれ、リングの長官の地位は世襲が認められる代りにペルシアの臣下という意識が強まり、シーラーズにいるシャーの代官に貢納しつつ、4島の支配をつづけるようになったことである。

表面的には、4島はペルシアの臣下であるリングの長官によって支配されているように見え、とりわけリングから近い大トンプ島についてはペルシアの領土であるとイギリス側の出先き外交官の目にも映るほどであった。しかし、ペルシアの臣下であるリングの長官が4島の支配をつづけたのはペルシアの役人の資格においてではなく、あくまでアラブ沿岸に本拠のあるジョワーシム部族の長の1人としての資格においてであった。すなわち、アラブのジョワーシム部族の長がリングの長官として4島を支配していたことに4島支配の二重性格の核心があった。アラブ側は4島の支配は一貫してアラブのジョワーシム部族の長が担当していたのであり、4

島の領有権はアラブ側にあると主張し、ペルシア側は4島の支配に当たっていたのはペルシアの役人であるリングの長官であって、したがって4島はペルシア領であると主張することが出来た⁸⁾。

イラン側による4島の領有権主張を補強したものに当時イギリスによって作成された地図上の色分けがあった。War Officeの情報局が1887年に作成し、ペルシアのシャーにも献上した地図では4島および大・小ファール島はペルシア領として表示されていた。また、1892年作成の非公式のカーズン卿のペルシア地図 (Lord Curzon's Map of Persia) でも、1897年のインド概観図 (Survey of India Map) でもアブー・ムーサ島および大トンプ島はイラン領として表示されていた。イギリス当局はこれらの地図での表示は間違いで、イギリス政府の公式見解ではないという態度を堅持した⁹⁾。

この二重性格を持つ4島に対する複雑な支配は1887年イラン(当時はペルシア)によってリングの長官に任じられていたジョワーシム部族の長がリングから追放されたことで幕を下した。4島に対する支配は湾岸のアラブ沿岸に本拠をおくジョワーシム部族に属するシャルジャの首長によって直接行われる方式に戻った¹⁰⁾。

IV. イランによる領有権主張

1. シッリ島の占拠 (1887年)

19世紀末以降、イラン側による4島のいずれかに対する領有権の主張ないしそのための実行使の事例として初めてのケースが1887年のシッリ島の占拠である。1887年9月、小型大砲2門を装備した小部隊がイランからシッリ島に送り込まれ、旗を掲揚するための竿を建て、イランの旗を掲げ、イラン人がシッリ島の長官に任命された¹¹⁾。

シャルジャの首長から要請されたイギリス当局は、シッリ島にまちがいにイランの旗が掲げられていることを確認するとともに、シッリ島は条約によってイギリスの保護下にあるシャルジャ首長の領有下にあると判断しシャルジャ首長に代ってイラン側に抗議するとともに、イラン側にシッリ島占拠の根拠を示すように求めたりした。イギリスの立場は、イラン側はシッリ島からイランの旗を撤去し、現状復帰しなければならない、というものであった。

イラン側からのシッリ島占拠の根拠に関する回答はそれまで継続していたシッリ島などの支配の二重性格をイラン側に好都合に解釈してのものと、この議論は水かけ論に終わった。イギリスとイランの間のシッリ島をめぐる外交上のかけ引きは事件が起ってから1年間ほどつづけられた。イギリス側はシッリ島の現状復帰を主張するのみで、それ以上の強硬手段を講じないまま、1888年8月イギリスにとってもっと重要な交渉をイランとの間で促進するため、シッリ島問題は一旦棚上げにされ、以後再開されることなく推移した。これは結局、イランによるシッリ島の占拠を黙認することとなり、その後のイギリスの立場は、大局的な政治的判断でイランによるシッリ島の占拠を事実上 (de facto) 黙認し、法律上では (de jure) 認めない、というものであった¹²⁾。

2. アブー・ムーサ島、大・小トンプ島の占拠ないし領有権主張

1904年4月イラン(当時はペルシア)に雇われているベルギー人税関吏が守備兵とともにアブー・ムーサ島と大トンプ島にやってきて、そこに掲げられていたアラブ側の旗を撤去して、新しい旗竿を建てイランの旗を掲げた。シャルジャの首長は直ちにイギリス当局に訴え、イギリス政府はシャルジャ首長に代ってイラン側に両島の占拠をやめるよう申し入れた。

イギリス側は今回はかなり強硬な態度をとり、砲艦にシャルジャ首長の代理人を同乗させて出動させ実力でイランの旗などを撤去することを考え

た。しかし、実際にその案を実行する前に、イラン側が自主的に退去する機会を与えることとし、その旨イラン側に申し入れた。

イラン側は、アブー・ムーサ島と大トンプ島は自国領であると主張しながらも、問題が解決するまで双方いずれの旗も掲げないという提案をしつつ、事件発生からおよそ1カ月後に自ら2島から退去した。イギリス側はイランの提案を無視してシャルジャの旗を掲げ直した。それに対しイラン側から特別強い反撃はなかった。

翌1905年大トンプ島にシャルジャの首長が新しい建物を建築中でけしからんという苦情がイラン側からイギリス当局に寄せられ、調べたところ何の根拠もないことが判明するということがあった。これはある意味でイラン側からの大トンプ島に対する領有権主張に発展しかねない苦情であり、イギリスはこの機会を利用して、シッリ島の領有問題はまだ未解決であることを指摘し、イランが大トンプ島に対して領有権の主張を蒸し返すならば、シッリ島に対するアラブ側の領有権の主張が蒸し返されるであろうとイランに警告した。イギリス側はシッリ島とその他4島を取り引きさせようと考えていたようである。

1923年に再びイラン側にアブー・ムーサ島と大トンプ島に対する領有権を主張する動きがあることが察知され、テヘラン駐在のイギリス公使はイギリス外務省の訓令に基づいてイラン首相に対し、前回の1904年の事件の際にアブー・ムーサ島と大トンプ島からイランの旗を撤去するために海上作戦までも準備したことに注意を喚起するなどして、強く警告した。その結果、事態はそれ以上の進展を見ないまま収まった。

1925年の秋イランの税関当局は1隻のランチをアブー・ムーサ島に派遣し、ベンガラ (red oxide) 資源を検査し、1袋のベンガラを持ち去るという事件が起った。現場で抗議を受けたイラン側はアブー・ムーサ島はイラン領であると答えた。

テヘランでイギリス公使がイラン外務省に強硬に抗議し、1923年の場合

のやりとりと言及した上、イラン側がアブー・ムーサ島の領有権主張をつづけるならばイギリスはアブー・ムーサ島に軍艦を派遣してシャルジャの首長の権益を守らざるをえなくなるであろうと警告した。その結果、イラン側は軟化し、アブー・ムーサ島と大トンプ島についてその領有権についてイラン外務省の回答があるまで行動を起さないようにという指示がイラン政府から出された。

1928年7月にまたまたイラン税関のランチが大トンプ島南方海上で、客とわずかの砂糖およびデーツを運んでアラブ沿岸のハサブに向っていたドバイのダウ船を拿捕して、イラン沿岸のリングに連行するという事件が起った。リングで積荷は密輸品として没収され、乗客は投獄された。この事件はアラブ側を強く刺激して、あわや直接報復に出ようとするほどであった。

テヘランではイギリス外交当局によって精力的な外交折衝が展開された結果、ダウ船とその乗客・乗員は釈放された。しかし、積荷は没収されたままで、それに対する補償を請求したところイラン側は大トンプ島に対する領有権主張を蒸し返してきた。このときイラン側が領有権主張の根拠として持ち出したのが1887年 War Office の情報局によって作成され、大トンプ島などをイラン領として表示してある地図であった。

イギリス側は、すでに述べたように、このような地図での表示はまちがいで、イギリス政府の公式見解を示すものではないとし、また地図でどのように表示されたとしても大トンプ島に対するシャルジャ首長の領有の合法性は損われなかったとした。

イラン側はこれらの島のうちでもイラン側沿岸に近い大トンプ島により関心が高かった傾向がうかがわれ、イギリス側としては4島の領有権争いにどのように最終的決着をつけるかに腐心していたようである。その1つの案が1930年に検討された大トンプ島をイランに売却ないし租借させるというものであった。イラン側も大トンプ島を確保できるならばアブー・

ムーサ島に対する領有権の主張を取り下げてもよいという意向であった。しかし、大トンプ島のイランへの売却案はラス・アル=ハイマ首長の反対でつぶれ、租借案も50年の長期間の租借ならば効果は同じとイラン側が乗り気になり、ラス・アル=ハイマ首長の島に対する主権を認めて租借料はラス・アル=ハイマ首長に納め、かつラス・アル=ハイマ首長は島に守備隊を駐留させることが出来るなどと妥協案を示した。

ラス・アル=ハイマ首長は条件いかんでは租借に応じてよいとして、大トンプ島には従来通りラス・アル=ハイマ首長の旗が掲げられ、首長の代表者が駐在し、島の住民のうちラス・アル=ハイマ系の住民に対してはラス・アル=ハイマ首長の同意なしではいかなる命令も出せないなど8項目からなる条件をつけた。これでは租借するイラン側にとってうまみがほとんどなくなってしまうほどの厳しい条件で、この案も結局成立しなかった。

当時湾岸ではイランとイラクですでに石油の生産が始まっており、パハレーンで石油利権交渉が成立していた。シャルジャでもラス・アル=ハイマでも石油資源の可能性に対する関心が高まりつつあった時点であった¹³⁾。売却にしる租借にしる島を手離して石油の可能性も同時にイランに渡してしまう愚を避ける知恵が働き、大トンプ島の租借条件をつり上げさせたのかも知れない。

イギリスは内心推進したかった大トンプ島のイランへの売却ないし租借案が不成立に終わった後の1934年、イランが大トンプ島の領有権主張を繰り返し、ラス・アル=ハイマ首長の権利にこれ以上干渉するならば、イギリスは武力を行使してでもラス・アル=ハイマ首長の権利を擁護することになるとの嚴重な警告を発した。

その後第2次世界大戦をはさんで1948年まで何もしなかったイランは、同年12月ロンドンでイラン大使館参事官が本国からの訓令によってイギリス外務省を訪れ、イランが領有権を有する大トンプ島とアブー・ムーサ島に行政事務所を開設したいのでイギリス側が反対しないことを確認した

いと申し入れた。この際イランは、イギリスがこれまで両島に対するラス・アル=ハイマとシャルジャの領有権を認めていることを承知しており、かつイギリスがイランの行動に反対していないことを確認するまでは行動を起こさないとつけ加えた。数日後にはイラン大使自身も来訪し、イランが両島に関心を持つ主な理由はこの両島を基地にして行われている密貿易を抑制したいからであると述べ、イギリス側の好意的な対応を求めた。

イギリス側は、イランが両島に対する領有権主張を生かしておくための周期的試みに出たものと判断し、イギリスとイランの間の友好的な関係に配慮してイランが性急な行動には出ないものと信じるとイラン側に伝えた。しかし、イギリスは、イランが大トンプ島に対する領有権主張を蒸し返すならば、アラブはシッリ島に対する領有権主張を蒸し返すであろうと1905年にイランに警告したと同じ警告を繰り返すこと、それでもイランがなお領有権の主張に固執するならば、イギリスはこの問題を国際法廷に提訴することを検討していた。

なお、イギリスは翌1949年1月現地の出先機関の係官を両島に視察に赴かせ、両島が密貿易に利用されている形跡がないことを確認している。このようなわけでイランはこれ以上具体的な実力行動には出ないまま終わった¹⁴⁾。

1949年9月には、大トンプ島の灯台職員からの情報によれば、イラン人が小トンプ島にやってきて旗竿を建てたと大トンプ島の住民がいつていると、イギリス船の船長からイギリス外務省に通報があった。イギリスはバハレーンの出先機関の係官を小トンプ島に派遣して調べさせたところ、20フィートの高さの立派な旗竿が建てられ、イランの旗の色を塗ったブリキ板がその根元に置かれているのが確認された。係官は旗竿を抜いて断崖に放り投げ、ブリキの旗は持ち帰った。

この事件の後、イギリスはラス・アル=ハイマに対し、大トンプに駐在しているラス・アル=ハイマ首長の代表にときどき小トンプ島を訪問させ、そ

の際にはラス・アル=ハイマの旗を掲げること、また塚やケルンを築いてラス・アル=ハイマの領有の証を明示するよう勧告している。

V. イランによるアブー・ムーサ島と大・小トンプ島の占領 (1971年)

第2次世界大戦後イギリスは疲弊し、ワールド・パワーとして湾岸をはじめとする世界の7つの海に君臨する力量を失い、1971年末までに湾岸を含むスエズ以東からイギリスの軍事的プレゼンスを撤退させると1968年に決定した¹⁵⁾。アラブ側各首長の対外的保護の任に当たってきたイギリスが軍事的に湾岸から撤退することになって、イランによるアブー・ムーサ島および大・小トンプ島の占領を阻む勢力はなくなった。1971年11月30日、イギリスがアラブの首長との間で結んでいた各種条約の有効性が終る前日にイランはこれら3島を占領したのであった¹⁶⁾。

シャルジャの首長はイランとの間にアブー・ムーサ島について、イランの軍隊を島に展開させる。しかし、シャルジャの旗が掲げられ、住民はシャルジャの支配下に置かれる。島で生産される石油その他天然資源による収益はイランとの間で折半するなどの内容からなる協定に調印した¹⁷⁾。これは、シャルジャはアブー・ムーサ島に対する主権は維持するもののイランの事実上の支配を認めるということを意味した。同様の協定を大・小トンプ島について結ぶことを迫られたラス・アル=ハイマ首長は調印を拒否した。基本的にはこの状態で今日(1993年)まで至っている。

イランによるこれら3島の占領は直接にはシャルジャおよびラス・アル=ハイマの領有権の侵害であったばかりでなく(イランが3島を占領した日の2日後1971年12月2日にシャルジャやラス・アル=ハイマも加盟するアラブ首長国連邦が成立した)、この占領はペルシアによるフラブ領土の占領であるとしてイラクなどが反発した。1980年9月、イラクのサッダーム・

フセイン大統領はイランとの戦端を開くに際し、イランによって占領されているアブー・ムーサ島および大・小トンプ島の奪回をかけた、イラン・イラクの戦争の正当性の一助にしようとしたことは記憶に新しい。

イラン・イラク戦争はこれら3島の現状に何らの変化も生じさせずに終わった。それにつぐ湾岸戦争で、イラクのサッダーム・フセイン大統領が軍事的に大敗を喫した後、これら3島の領有権問題がアラブ首長国連邦から改めて提起され、アラブ連盟もそれを支持して、再びアラブ・ペルシアの抗争として浮上しつつある。

注

- 1) 地図上や本文中で引用する資料の中などでは必ずしも大トンプ島、小トンプ島と表記されていず、トンプ島および小トンプ島と小さい方にのみ「小」が冠せられている場合が多い。ここでは最近の傾向にしたがい、かつ分かり易さのために、「大」と「小」を冠して表記する。ファルル島についても同様である。
- 2) Richard Schofield and Gerald Blake (eds.), *Arabian Boundaries: Primary Documents 1853-1957*, Vol. 13, Farnham Common, Buckinghamshire, England, Archive Editions, 1988, p. 79. (以下この文献を引用するときは *Arabian Boundaries* として示す)。なお、小ファルル島がイラン領であるかどうかは問題ではあるものの、イギリス側の見解では小ファルル島はイラン領とされる大ファルル島の属領とされていた (*Arabian Boundaries*, Vol. 13, p. 89)。
- 3) *Arabian Boundaries*, Vol. 13, p. 79, 259 および 493.
- 4) *Ibid.*, p. 79.
- 5) *Ibid.*, p. 79, 136, 259-260 および 493.
- 6) ラス・アル=ハイマのシャルジャからの独立の経緯はイギリス側の理解によれば大略以下のものであった。

18世紀またはそれより以前から現在のアラブ首長国連邦の沿岸地帯を支配していたのはアラブのジョワール部族で、その長はシャルジャからラス・アル=ハイマに居住していた。そのうち、シャルジャが主な居住地となりラス・アル=ハイマはジョワール部族の長の一族の誰かが支配するようになった。1869年にラス・アル=ハイマ

はシャルジャからの独立を一方的に宣言し、その後再びシャルジャの指導権が回復されたことがあったものの1921年ラス・アル=ハイマの独立はイギリス側も承認するところとなり今日に至っている (*ibid.*, pp. 132-133)。

- 7) *Ibid.*, p. 79, 496 および 498.
- 8) *Ibid.*, pp. 79-80 および 133-134.
- 9) *Ibid.*, p. 79 および 85.
- 10) *Ibid.*, p. 134.
- 11) *Ibid.*, p. 19.
- 12) *Ibid.*, pp. 19-30, 36-38, 44, 79 および 136.
- 13) シャルジャ首長は Petroleum Concission Limited と 1937 年 9 月 17 日石油利権に調印し、ラス・アル=ハイマ首長は Petroleum Development (Trucial Coast) Limited と 1945 年 6 月 21 日石油利権調印した (*ibid.*, pp. 592-595)。
- 14) *Ibid.*, pp. 79-86, 111, 120-121, 135 および 255-256.
- 15) 石田 進『激動の湾岸世界』御茶の水書房、1985 年、20-21 頁。
- 16) Alvin J. Cottrel (general ed.), *The Persian Gulf States*, Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press, 1980, p. 176.
- 17) Jasim M. Abdulghani, *Iran and Iraq: The Years of Crisis*, London, Croom Helm, 1984, p. 91.

キーワード： 湾岸、領土紛争、アブー・ムーサ島、トンブ島、シッリ島

A Case Study of Territorial Disputes on the Gulf Islands of Abu Musa, Tunbs and Sirri

by Susumu ISHIDA

Behind the disputes over ownership of the Gulf Islands of Abu Musa, Tunbs and Sirri were the so-called dual characteristics of the governance of these islands. From about 1750 until 1887, these islands had been ruled by the Arab Shaikhs of the Jowasimi tribe residing in the Persian town Lingah. Those Arab Shaikhs of the Jowasimi tribe in Lingah had been regarded as Persian subjects and had been granted the Persian title of Governor of Lingah. Therefore, from the Arab viewpoint these Gulf islands had been under Arab rule, while from the Persian viewpoint, they had been under Persian sovereignty. Thus, both sides have claimed ownership of these islands.

In 1887, Persia occupied the Island of Sirri by force. Since then the Persian seizure of it has been acquiesced de facto, but has never been recognized de jure by Britain who represented the Arab Shaikhs under her protectorate. From 1887 until the 1960s, whenever Persia has tried several times to seize these Gulf islands, Britain has always obstructed Iranian trials.

But after World War II, when Britain lost her status as a world

super power and had to withdraw from the East of the Suez in the end of 1971, there were no longer any obstacles to hinder Iran from occupying the long-targeted Gulf islands. Actually Iran occupied Abu Musa and Tunbs on 30 November 1971, a day before the treaties between Britain and the Arab Shaikhs were terminated in order to allow Britain to withdraw from the Gulf. And since then, Iran has been keeping the Gulf islands under her military rule notwithstanding repeated complaints by the Arabs.

Recently, especially after the Gulf War, the Arab side has again raised objection to the Iranian seizure of these Gulf islands resulting in Iranian rejection. The on-going conflict over the Gulf islands is causing serious instability in the Gulf leading to a severe increase in the arms race.